

Ⅱ 推定馬寮北辺地域の調査（第127次）

平城宮の西辺部、西面中門と西面北門とにはさまれた一帯は、第47・50～52・59・63・71次の7回にわたる発掘調査によって、諸国の御牧や官牧から毎年貢上される馬を飼育・調教する役所、すなわち馬寮があった場所と推定されるに至っている。その官衙域は、平城宮の西辺に接し、東西は南北塀、南は西面中門からのびる道路、北は築地塀で区切られた東西84m、南北約250mの細長い区域である。この地域が馬寮に推定されたのは、㊸厩と考えられる桁行の長い建物が多く、これらを官衙域の周辺部に配置し、中央部を空地としていること、㊹「内厩」「主馬」と墨書した土器片が出土していること、㊺平安宮においても、左・右馬寮は宮の西辺部に配置され、東西35丈（約106m）・南北84丈（約254m）の南北に長い近似した官衙域を有すること、の3つの理由による。

平城宮第127次発掘調査地は、奈良市二条町1丁目4番で、推定馬寮官衙域の北辺部分にあたる。同地は従来宅地のために調査できなかったが、昨年度国有地となり、宮跡の環境整備事業に先立って発掘調査を実施することになった。

今回の調査地は従前の調査地と南（第59次北）および東（第63次）で隣接している。調査区はこれら過去の調査で検出した遺構と一部重複するように、東西34m・南北30mの範囲で、西北の私有地を除いた逆L字形に設定した。調査面積は780㎡、調査期間は昭和55年10月13日から12月1日までである。

土層は上から表土・灰褐砂質土・黄褐粘質土・暗褐粘土・青灰粘質土（地山）・黄褐砂質土（地山）で、黄褐砂質土は全体としては北から南に下降しながらも、調査区中央では比較的高く隆起して部分的に上層の地山である青灰粘質土を欠いている。奈良時代の遺構は暗褐粘土をやや削り込んだ面、地表から60～70cmの深さで検出した。暗褐粘土は調査区北部の築地南雨落溝SD6479以南に全体的に分布するが、上層部で若干奈良時代の遺物を含むので整地土と考えられる。

遺 構

検出した遺構は、掘立柱建物5棟、築地塀1条、掘立柱塀1条、井戸状土塋1

基である。

掘立柱建物SB 6430は、従前の調査（第59、63次）でも一部が検出されていたが、今回の調査によって南北に庇をもつ桁行14間以上、梁行4間、柱間寸法は桁行と庇の出が8尺等間、身舎梁行が10尺2間の長大な東西棟であることが判明した。

掘立柱建物SB 6469は、従前の調査分とあわせて桁行7間、梁行2間の東西棟（8尺等間）となり、柱掘形の重複関係から、SB 6469はSB 6430よりも新しいことが判明した。

掘立柱建物SB 9552は、桁行3間（8尺等間）、梁行2間（7尺等間）の東西棟で、この南側柱筋はSB 6469の南側柱筋とそろっている。

掘立柱建物SB 6429は、従前の調査分とあわせて桁行5間（9尺等間）の南北棟であるが、妻柱の痕跡は南北ともに検出されない。柱掘形の重複関係から、SB 6429はSB 6430よりも新しいことが判明した。

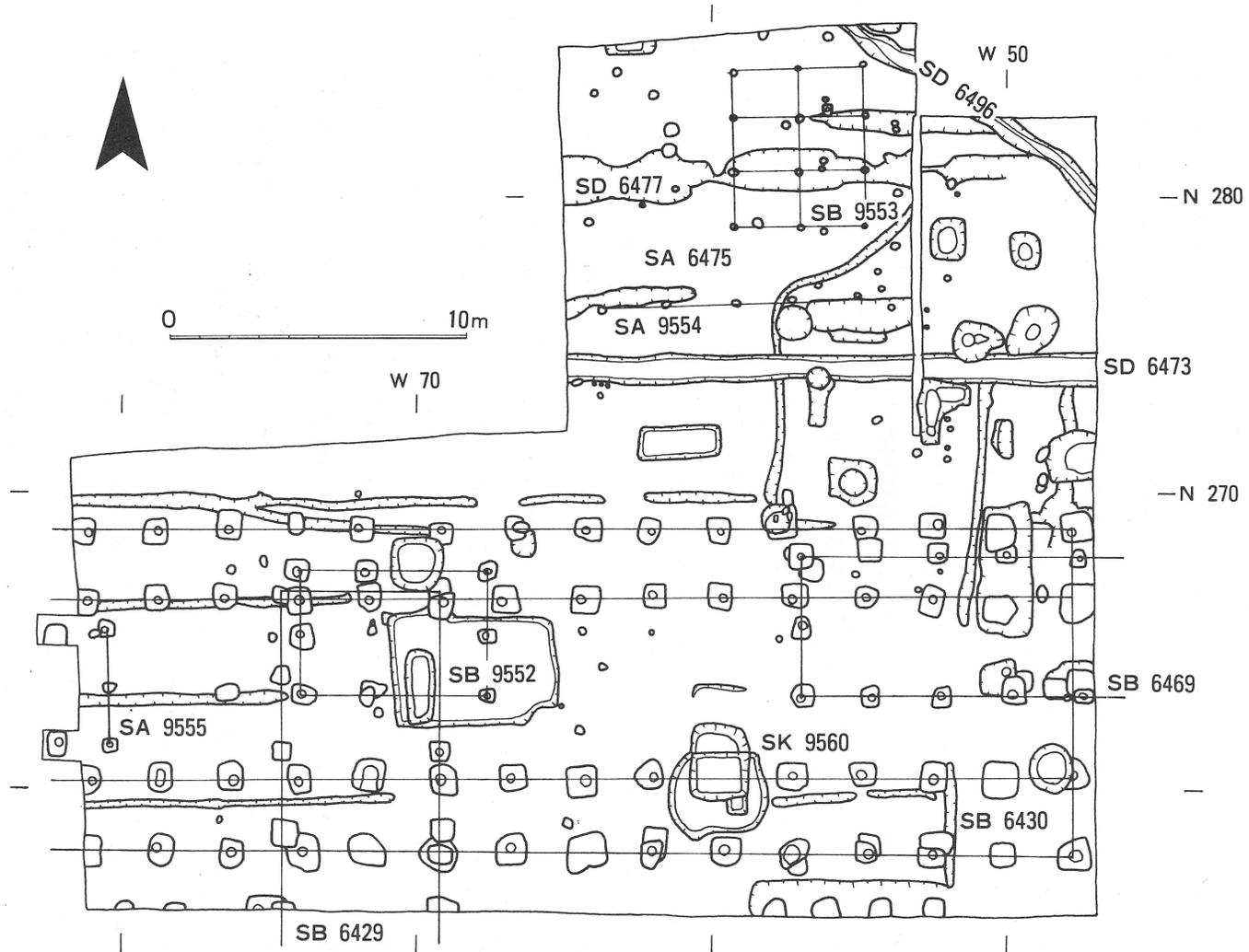
掘立柱建物SB 9553は、桁行3間（6尺等間）、梁行2間（7尺等間）の総柱の南北棟で、馬寮北限の築地SA 6475が廃絶、削平された後に建てられている。

東西溝SD 6473・6477は素掘りの溝である。SD 6473は幅1.0m、深さ0.4mであるが、SD 6477は幅・深さともにきわめて不定形である。SD 6473の埋土上面には、凝灰岩の粉が一面に認められた。この両溝は築地塀SA 6475の南北の雨落溝と考えられる。

築地塀SA 6475は、著しく削平されているが、SD 6473・SD 6477の間で掘り込み地業の痕跡を検出した。また、SS 9554はSA 6475にともなう足場穴と考えられる。

掘立柱塀SA 9555は調査区西端で検出した2間の南北塀である。柱位置の西を拡張したところ、対応する柱穴はなく、少し柱間寸法の異なる、より大きな柱掘形が検出されたため、西側には別に掘立柱建物（SB 9569）が存在し、これにともなう目隠塀ではないかと考えられる。

土壙SK 9560は、径約3m、深さ1mほどの大土壙で、SB 6430よりも新しい。底部に奈良時代の丸・平瓦片を含んでいたが、後世の遺物はなかった。一見井戸状を呈するが性格は不明である。



第4図 第127次発掘遺構図

遺物

出土遺物は全般的に少なく、灰釉皿片 2 点・緑釉碗片 4 点・緑釉唾壺片 1 点をふくむ土器片と、軒丸瓦片 2 点（6231・藤原宮式）・軒平瓦片 4 種 8 点（6664・6721・6641・6681）を含む瓦片以外には顕著な遺物はない。なお、SB 6430 の柱掘形から軒平瓦 6664-D 型式が出土している。

まとめ

今回の調査では 3 時期以上に及ぶ建て替えが明らかになったが、従来の推定馬寮官衙域の発掘調査でも 3～4 期にわたる建物群の存在が明らかになっている。その変遷について、現時点での成果を次にまとめておきたい。

A 期 この時期の馬寮は、北を築地 SA 6475、東西を掘立柱塀で区画された東西 84 m、南北 250 m の官衙域内の北に正庁と思われる東西棟と付属建物とを有し、厩舎と思われる長大な南北棟を北・東・南に配し、西寄りの中央部を空地としていた。

B 期 B 期になると、西を区画していた塀がとりはらわれて、官衙域は西面大垣にまで拡大したようである。この時期の建物は官衙域の北半部に集中し、南半部を空地として残している。北中央に庁舎と思われる建物群を置き、その東西と北に長大な建物がめぐる。今回の調査で検出した長大な建物 SB 6430 もこのひとつである。また西面大垣に接して鍛冶工房が設けられた。

C 期 C 期は基本的に B 期に近似した建物配置で建て替えがなされているが、規模が若干縮小するようである。今回の調査で検出した SB 6469 や SB 9552 もおそらくこの時期のものであろう。

D 期 D 期は平安時代にまで下降する。この時期には北への築地 SA 6475 などの区画は廃絶しており、旧馬寮官衙域の南に、方位を北からやや東に振った小さな建物群が集中する傾向があり、この時期はさらに細分することが可能である。今回の調査で検出した SB 6429 や SB 9553 もこの時期まで下降する可能性がある。